

コロナ後遺症 戻らぬ日常

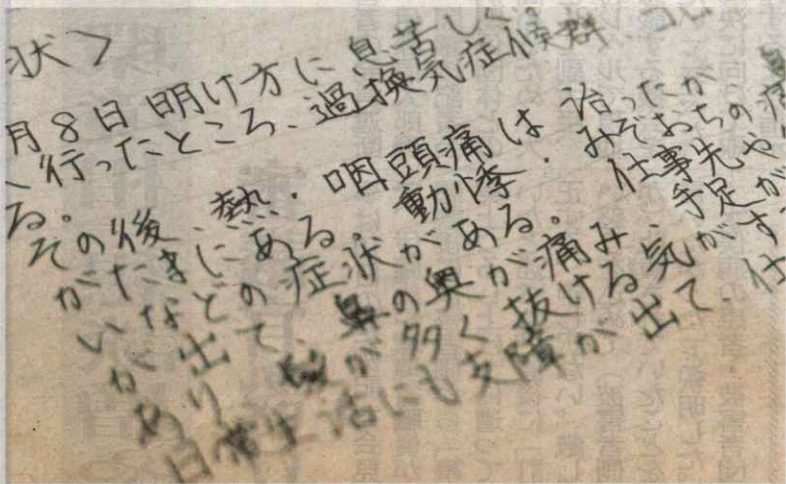
5類1年、失職や孤立も

県内

新型コロナウイルスの5類移行から1年。県内ではコロナの後遺症により、日常を取り戻せない人たちがいる。息苦しさや倦怠感などに日々悩まされ、職を失った人も。小山市の医療機関では現在も、月に約30人の後遺症患者を診察しており、医師は患者の孤立を懸念する。働き盛りの年代が多く、「仕事ができなくなる」という悩みが圧倒的に多い。復帰に向けたサポートが必要だと周囲の理解を求めている。

(野中美穂)

復帰へ「周囲の理解必要」



9カ月間、コロナ感染の後遺症に苦しんでいる。

女性は2023年8月、

コロナに感染し、過呼吸状態になる過換気症候群を併発した。コロナの症状がなくなった後も、息を吸っているのにうまく体に入らない感覚に襲われ呼吸が乱れた。横になるとつらく、夜はベッドに座って眠った。

鼻の奥の痛みや手足のしびれなども現れた。症状がない時も「また呼吸が乱れたらどうしよう」と不安がよぎり、好きだった遠出も怖くなった。

家族や職場の同僚もコロナに感染したが、周囲で後遺症があるのは自分だけ。「何で自分だけ長引くのか」

後遺症に苦しむ女性の母親が症状を記録したメモ。「日常生活に支障が出て、仕事にもあまり行けない」と記されている

のままは困る」「辞めるか、休職するか、頑張らなくて働くか。どうするのか」と迫られた。2カ月後、23年度末で雇用契約を終了すると告げられた。

心身の負担が重なり、12月にはパニック障害とうつ病と診断された。女性は「後遺症に悩む人を減らすためにも、コロナを甘く見ず、5類移行後も感染対策をしてほしい」と願う。

コロナの後遺症患者を診察している小山市雨ヶ谷町、おぐら内科・腎クリニックの小倉学院長(47)は「コロナ感染者の10人に1人が後遺症になるというデータもあるが、明確に後遺症とは分かりづらい。ほとんどの人が治る中、一部の人たちが長期間苦しみ続け孤立してしまう」と危惧する。

30〜40代の働き盛りの患者が多く、「倦怠感や(集中力や思考力が低下する)、ブレインフォグがあると、仕事ができなくなる。傷病手当金も受給期間が決まっており、退職すると経済的にも追い込まれる。後遺症患者とそうでない人との間で格差が生まれている」と指摘。職場での後遺症への理解促進に向け、「従業員

の症状に目を向けて対応してほしい」と訴えた。